

良心学を語る

— 学際研究における方法論的探求 —

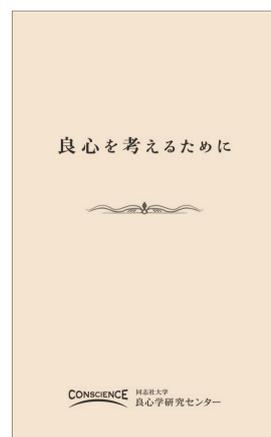
冊子『良心を考えるために』の執筆者が登壇し、執筆の意図を語ると同時に、良心学の「方法論」についての考察を深めていきます。登壇者各自の専門領域から「良心学」にどのようなアプローチや貢献が可能なのか、そして、「良心学」における学際研究から、何を自分の専門領域にフィードバックできるのかを議論します。来場者には『良心を考えるために』を提供します。共に議論に加わっていただくことを期待しています。

● 日時：2017年 **9** 月 **29** 日（金）16:40 — 19:00

● 場所：同志社大学 今出川キャンパス 同志社礼拝堂

● パネリスト：

小原克博（同志社大学 神学部 教授、良心学研究センター長）、中村信博（同志社女子大学 学芸学部 教授）、下楠昌哉（同志社大学 文学部 教授）、木原活信（社会学部 教授）、和田喜彦（経済学部 教授）、林田 明（理工学部 教授）、貫名信行（脳科学研究科 教授）、内田 孝（京都新聞社 総合研究所 所長）、伊藤彌彦（同志社大学 法学部 名誉教授）



■ 問い合わせ 同志社大学 良心学研究センター

CONSCIENCE

E-mail : rc-csc@mail.doshisha.ac.jp <http://ryoshin.doshisha.ac.jp>

良心を世界に—良心を覚醒させる知の連携と知の実践 良心学研究センターは、現代世界における「良心」を考察し、その応用可能性・実践可能性を探求することを通じて、学際的な研究領域として「良心学」を構築し、さらにその成果を国内外に発信し、新たな学術コミュニティを形成することを目的としています。

パネリスト略歴

小原 克博 (こはら・かつひろ)

同志社大学神学部 教授、良心学研究センター長。同志社大学大学院神学研究科博士課程修了。博士 (神学)。専門はキリスト教思想、宗教倫理学、一神教研究。宗教倫理学会会長。著書『神のドラマトウルギー——自然・宗教・歴史・身体を舞台として』(2002)、『宗教のポリティクス——日本社会と一神教世界の邂逅』(2010) など。

中村 信博 (なかむら・のぶひろ)

同志社女子大学学芸学部情報メディア学科教授、学芸学部長。同志社大学大学院神学研究科博士前期課程修了。日本基督教団霊南坂教会担任教師 (伝道師、牧師)、同志社女子大学宗教部長などを歴任。文化史における聖書およびキリスト教神学、宗教学を研究。『旧約聖書注解 I』(共著) 『旧約聖書略解』(共著)、『聖書 語りの風景』(共編著) など。

下楠 昌哉 (しもくす・まさや)

同志社大学文学部教授。上智大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士 (文学)。専門はアイルランド文学。同志社大学体育会柔道部部長、全日本柔道連盟大会事業委員、講道館柔道五段。著書『妖精のアイルランドー取り替え子の文学史』(平凡社新書)、訳書イアン・マクドナルド『旋舞の千年都市』(東京創元社) など。

木原 活信 (きはら・かつのぶ)

同志社大学社会学部 教授。東京都立大学助教授、トロント大学客員研究員を経て現職。専門は福祉思想・哲学。著書『J.アダムズの社会福祉実践思想の研究』(1998) (福武直賞受賞)、『対人援助の福祉エートス』(2003)、『社会福祉と人権』(2014)、『弱さの向うにあるもの』(2015) など。

和田 喜彦 (わだ・よしひこ)

同志社大学経済学部 教授。1999年 ブリティッシュ・コロンビア大学大学院コミュニティー地域計画学研究科博士課程修了 (学術博士)。札幌大学、バーモント大学客員研究員を経て現職。専門は、エコロジー経済論。公害論。著作「エコロジカル・フットプリント開発の背景とその意義」『ビオシティ』56号 (2013)。『核開発時代の遺産：未来責任を問う』(共著 2017) など。

林田 明 (はやしだ・あきら)

同志社大学理工学部環境システム学科 教授。1982年 京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了 (理学博士)。研究分野は地球システム科学、古地磁気学・環境磁気学。岩石や堆積物の磁気特性を利用して、地球磁場の変動、年代測定、地殻変動、気候変動、環境汚染などの研究を行っている。

貫名 信行 (ぬきな・のぶゆき)

同志社大学大学院脳科学研究科認知記憶加齢部門教授 1977年東京大学医学部卒業。博士(医学)。東京大学神経内科助教授、理化学研究所脳科学総合研究センターチームリーダー、順天堂大学客員教授等を経て、15年から現職。専門は神経変性疾患の分子病態脳科学。著書に『脳神経疾患の分子病態と治療への展開』(2007年、共同編纂 羊土社)など。

内田 孝 (うちだ・たかし)

京都新聞社総合研究所所長。立命館大文学部中国文学専攻卒。1986年入社。舞鶴、丹波、草津などの総支局、東京支社と社会部、文化部などを経て、現在は文化全般の取材と、フォーラムや大学連携講座の企画・コーディネートを担当。共著に「まちひと100年の肖像」「琵琶湖と共に」(京都新聞社)、「松丸本舗主義」(青幻舎)。

伊藤 彌彦 (いとう・やひこ)

同志社大学法学部教授をへて名誉教授。東京大学大学院法学政治学研究科博士課程修了。日本政治思想史。著書『維新と人心』(1999)、『明治思想史の一断面—新島襄・徳富蘆花そして蘇峰』(2010)、『未完成の維新革命—学校・社会・宗教』(2011)、『自由な国の緘黙社会』(2012)、『なるほど新島襄』(2012) 他

良心学研究センター主催 公開シンポジウムのご案内

- 10月23日(月) 16:40 - 18:40、今出川キャンパス 同志社礼拝堂
「仏教とキリスト教の対話——共通善を求めて」
【講師】大谷光真(浄土真宗本願寺派・前門主)
【コメンテーター】小原克博(同志社大学 神学部 教授、良心学研究センター長)
- 11月17日(金) 16:40 - 18:40、今出川キャンパス 同志社礼拝堂
「同志社建学の精神——創立150周年とその先を見据えて」
【講師】沖田行司(同志社大学 社会学部 教授)
【コメンテーター】八木 匡(経済学部 教授)、林田 明(理工学部 教授)
- 12月15日(金) 16:40 - 18:40、今出川キャンパス 神学館3階 礼拝堂
「神学・国際政治と良心」
【講師】佐藤 優(作家、元外務省主任分析官、同志社大学 神学部 客員教授)
【コメンテーター】木原活信(社会学部 教授)、深谷 格(司法研究科 教授)
- 1月22日(月) 16:40 - 18:40、今出川キャンパス 同志社礼拝堂
「我等、地(つち)に生きん——持続可能な社会と人間の責任」
【講師】小原克博(同志社大学 神学部 教授)、和田喜彦(経済学部 教授)
【コメンテーター】三俣 学(兵庫県立大学 経済学部 教授)

総論

小原 克博

1. 良心学とは

「良心」やその隣接概念を共通のプラットフォームにしなが、現代において「良心」を学際的に研究し、それを日常生活において実践していくための新たな学問的基盤として「良心学」を考える。

2. 「良心」概念の思想的系譜

1) 西洋における「良心」

conscience ← conscientia (コンスキエンティア、ラテン語)
= con (共に) + scire (知る)

2) 誰と「共に知る」のか？

- ・自己の内面的な対話 (内なる他者との対話) 【個人的良心、自律的良心】
- ・他者と「共に知る」 【社会的良心、他律的良心】
- ・神と「共に知る」 【信仰的良心、神律的良心】

3) 日本における「良心」

conscience の訳語として「良心」が最初に用いられたのはブリッジマン・カルバートソン訳『新約聖書』(1863年)において、『孟子』から取られた。(『角川新字源』)

4) キリスト教的価値と世俗社会(啓蒙的価値)をつなぐ力としての「良心」

→ 対立する価値を調停する能力としての「良心」

3. 良心学の構造

1) 「統合知」としての良心

「良心」に隣接する諸概念(道徳、倫理、意識、認知能力、共感、利他性、対話など)を用いながら、幅広く人間の精神と行動を研究する。「共に知る」ことを原義とする良心の現代的機能は、細分化した多様な学問領域を「接着剤」のようにつなぎ合わせる「統合知」。

2) 「実践知」としての良心

新たな価値を広げ、社会に影響を与えていくためには、コミュニケーション能力やリーダーシップといった「実践知」が必要。

4. 方法論

1) 文理融合、新旧融合、東西融合、聖俗架橋

2) 良心の存在論：良心(利他性)の生物学的理解(進化生物学、遺伝学、赤ちゃん学)。

良心の発生論：他者(人間および神)との間において生起する良心(神学、社会福祉)。

聖書と良心

中村 信博

はじめに

キリスト教の源流とも言うべき聖書において、良心はどのように理解されているのかを探る。意外なことに、「良心」と翻訳される語は旧約（ヘブライ語）聖書には皆無であり、新約聖書においてはパウロの書簡を中心に30回の使用例を確認できるのみである。それにもかかわらず、キリスト教は「良心の宗教」とも言えるほど両者は密接なイメージのなかにある。本項では、そのイメージの由来とパウロ的良心の応用可能性について触れるとともに、聖書という文献についての導入的な説明をした。

I. 主要論点

1. 聖書と倫理的精神 「善いサマリア人」（ルカによる福音書 10 章 30~37 節）
2. 良心への言及 「良心が弱い者への配慮」（パウロ）
3. 聖書の背景を知るために 「聖書と読者との共同作業」
4. 聖書をどう読むか 「自分自身と世界とを発見する出来事」

II. 考察のフィードバック

- ・抽象的な議論ではなく、当事者性を意識した具体的な倫理観→臨床現場への応用
- ・ふたつの対象をもつ共有知

「世間と共に知る」（他律的良心）、「神と共に知る」（神律的良心）

（石川文康『良心論』名古屋大学出版会、2001年 第2章）

イエスは言われた。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』」律法全体と預言者とは、この二つの掟に基づいている。」（マタイによる福音書 22 章 37~40 節）

- ・ふたつの対象（神、隣人）

知→愛への変換装置 *隣人=自分

「自己自身と共に知る」（自律的良心）（石川『良心論』第3章）

- ・共同体論をの超克へ

III. 学際的可能性

- ・無宗教を含めた他宗教や価値観との対話可能性
- ・無境界的なコミュニティは可能か
- ・多分野における共同の原動力を提供できないか

おわりに

最良の参考文献としての「聖書」

文学と良心／スポーツと良心

下楠 昌哉

☆『良心を考えるために』における両項目は、研究のための基本文献を挙げるというより、純粹に「ブックガイド」を指向して書かれている。

◎文学と良心

- ・「読書」は極めて個人的な行為であるが、他者の書いたテキストと真摯^{しんし}に向き合い、自らの内でそれと対話を行うという点で、英語における「良心」、conscience が含意する「共に知る」という営為を体現している。
- ・文学、特に近代以降の小説作品においては、人間が陥る簡単に白黒つけられない個別の状況を扱った作品が多いため、たいていの作品に「良心」が何らかの形で扱われている。
- ・文学研究単体の枠内では、良心／conscience そのもの、あるいは良心をめぐる葛藤がどのように表象されているかについての先行研究が存在する。
- ・学際的にはどのような可能性が？（「良心」が単なる研究上の記号に陥らないような視点を提供するのは、文学研究者の役割かもしれない。）

★どうぞみなさんご自身でも、自分なりの読書を通じてマイ「良心を考える」ブックリストを作成してみてください！

◎スポーツと良心

ここに世にも不思議なグループがある。そこに所属するからといって格別の利益があるわけではなく、また金儲けができるわけでもない。それどころか、むしろ金を持ち出さねばならない。そのグループのメンバーは頼まれもしないことに骨を折って嬉々としている。一度その仲間となれば大抵終生変わらぬ堅固な帰属心によって結ばれる。体育会のメンバーこそ渾身の力をこめて競技をするという体験を共有する人たちのグループである。このグループに幸あれ、慰めあれ。

——第十五代同志社総長 上野直藏先生

- ・スポーツに携わる人々が社会の中で受ける様々な心的圧力
→ 多様な学際的発展性が明確に感じられるマッチング
(ただし、結論が先にありきの研究に陥らない注意は必要か。)
- ・スポーツに関する歴史の研究者が直面する「不都合な真実」
- ・柔道の始祖・嘉納治五郎師範が柔道の修行内容を「形と乱取り、講義と問答」としていたこと
- ・同志社大学体育会の活動が同志社の「良心教育」を体現する時の到来を願って

社会福祉と良心

木原 活信

「少なくとも一日一回は、もし自分が、旅券をもたず、冷蔵庫と電話のある住居をもたないでこの地球上に生き、・・・膨大で圧倒的な数の人々の一員だったら、と想像してみてください」(iii)。「傾注は生命力です。それはあなたと他者とをつなぐものです。それはあなたを生き生きとさせます。いつまでも生き生きとしていてください。良心の領界を守ってください。」(iv) ソンタグ『良心の領界』より

1. 良心とコンパッション

Conscience con+science

スーネイデイシス σ υ ν ε ι δ η σ ι ς (ギリシャ語) ⇒ 「共に知る」

聖書のなかの「良心」の語法から

コンパッション compassion

Com+passion 「共感共苦」 ギリシャ語 スプラングニズマイ

良心、コンパッション、そしてそのメカニズム

2. 社会福祉と良心

福祉実践行動の原動力、起爆剤となる

「良きサマリア人」スピリッツ ⇒ 欧米福祉の源流 “キリスト教的良心”

主流派でなく、組織力もないときに生じる

ウエスレーと国教会 救世軍と国教会 ミュラーと国教会 クエーカーと国教会

*ジェーン・アダムズの場合 セツルメント運動

3. 日本の場合 欧米キリスト教の影響

同志社「社会福祉」派 or 「良心派」の系譜 新島襄⇒山室軍平、留岡幸助、石井十次、牧野虎次、賀川豊彦、中村遥、竹中勝男、竹内愛二、嶋田啓一郎、金徳俊

*山室軍平の場合 貧困者、娼婦

まとめ

現代の社会問題と良心

格差社会、社会的排除、差別、自殺

エコロジー経済論・公害論と良心

和田 喜彦

1. 資源環境問題を「質」から見る

公害論、公害史、環境政策史、社会学、鉱山学、衛生学、精神衛生、社会福祉学、法学、
介護論、水俣学

環境の「質」の劣化 ⇒ 健康の劣化 ⇒ 身体的苦痛、
差別・社会的疎外 精神的苦痛
人間関係の「質」の劣化
就職差別、経済的困窮
生活の「質」の劣化、

栗原彬（『良心を考えるために』84頁）

和田喜彦。2015年。「マレーシアでのレアアース資源製錬過程による環境問題:エイジアンレアアース(ARE)事件の現況とライナス社問題」『環境情報科学』43(4): 32-38。

2. 資源環境問題を「量」から見る

人口論、生態学、エコロジー経済論、エントロピー論

生態系サービスの供給能力（供給サイド）と人間による利用量（需要サイド）

環境収容力、環境容量、バイオキャパシティ（供給サイド）

エコロジカル・フットプリント（需要サイド）

ハーマン・デイリー（『良心を考えるために』82頁、83頁）

マティース・ワケナゲル、ウィリアム・リース著。和田喜彦監訳、池田真里訳。2004年。
『エコロジカル・フットプリント:』合同出版。

3. 資源環境問題を「人間の本質」「公正さ」「分かち合い」「関係性の豊かさ」から見る

倫理学、宗教倫理、神学、仏教学、進化人類学、経済人類学、生物学、心理学、脳科学、
神経科学、行動経済学、神経経済学、エコロジー経済論、市民運動論、政治経済学

ホモ・エコノミカス（経済人間）の再検討

利他主義、他愛、共感本能（compassionate instinct）、慈悲

林竹二（『良心を考えるために』87頁）

アダム・スミス（『良心を考えるために』、八木匡、7章、67頁）

サティシュ・クマール（『良心を考えるために』88頁）

賀川豊彦。2009年。『友愛の経済学』コープ出版。

4. 資源環境問題を「戦争」「軍拡」「フクシマ問題」から見る

平和学、平和運動論、歴史学、環境科学、医学、放射線医学、国際法、戦争と経済

ロザリー・バーテル（『良心を考えるために』87頁）

坂田静子（『良心を考えるために』85頁）

小出裕章（『良心を考えるために』86頁）

樋口健二（『良心を考えるために』86頁）

中川保雄。2011年。『増補 放射線被曝の歴史：アメリカ原爆開発から福島原発事故まで』明石書店。

若尾祐司、木戸衛一編。2017年。『核開発時代の遺産：未来責任を問う』昭和堂。

科学技術と良心

林田 明

- Science という言葉はラテン語の scientia (知識) に由来するが、近代以降、自然の法則とそれを追求する営みのことを示すようになった。ニュートンやケプラーなどの時代、観察や実験、理論と実証によって自然を解き明かす行為は、聖書の他に神が著したもう一つの作品である自然の姿に神の意図を読み取るために行われた。
- 「知は力なり」(scientia potentia est) という格言は、「神の贈与によって人間によって人類のものとなっている自然の支配権」という考えを前提とする。啓蒙主義の発展にともなうて 18 世紀には「人間のための科学」という考え方が生まれた。
- Technology (技術) はラテン語の technologia (組織化した手練) から派生した言葉で、science とは由来を異にする。しかし産業革命以降、技術は科学に支えられて進展し、技術から科学の新しい展開が生まれることにより、科学と技術は一体化することになった。
- 旧約聖書の記述に沿った天変地異説や水成論といったパラダイムに対し、「現在は過去の鍵である」という言葉に要約される斉一説が登場した。さらにチャールズ・ダーウィンが、自然界のデザインに神の意志を必要としないという着想の下、種の中の個体変異と生存競争、自然淘汰という現象をもとに種の起源と多様性が説明できるという進化論を唱えた。
- 新島襄がニューイングランドに学んだ頃、アーモストには神学的自然観が色濃く残っていた。しかし、彼の蔵書には C・ライエルの『地質学原理』や T・ハクスリーの著書が含まれており、近代地質学の誕生や進化論の展開に注目していたことがわかる。
- 新島が生きた時代は、世界的な大学教育の変革の時期でもあった。19 世紀初頭のドイツにおける大学の「第二の誕生」を契機とし、アメリカでも科学技術や農学などの専門教育のためのカレッジや大学院が生まれた。
- 20 世紀には科学技術の成果が社会に投入され、国家を支える軍事と産業の強化に貢献する役割が重視されるようになった。同時に、公害や原子炉の事故、地球環境問題など、科学技術の負の側面が顕わになっている。
- 近代科学の形成に貢献した研究者の行動規範は CUDOS (Communitarity : 公有主義、Universality : 普遍主義、Disinterestedness : 無私性、Organized Skepticism : 組織的懐疑主義) として表される。一方、産業と強く結びついた科学は PLACE (Propriety : 所有性、Local : 局所性、Authoritarian : 権威主義、Commissioned work : 請負性、Expert work : 専門性) を特徴とする。
- 現代の科学技術は専門的職業として営まれており、個人の営みや専門家の自治といった伝統から離れつつある。現代の科学者と技術者の良心について考えるとき、社会システムのなかで、時代に適合した「職務」の規定や倫理的義務の再構築が必要とされる。

科学の研究が職業としての行われる場合、担当部署や専門分野の垣根を越えた理解や批判が困難になる。大学と大学院の教育研究も、職業としての学問に添ったものになっている。目的解決型にとらわれない、文明の基礎としての大学の役割を考えるべきではないか。

脳科学と良心

貫名 信行

1. 脳の機能局在はどのようにして同定されてきたか
19世紀は分類の時代：アルツハイマー病、パーキンソン病などの脳の病気を症状と病理所見で同定。脳の局在論の端緒として言語中枢の同定が行われた。神経機能の欠損と脳の損傷部位を対応させることによって、その機能を司る脳部位を同定した。その後脳外科手術の際に、脳刺激を行い、言語機能の障害を起こしたり、発語発作を起こしたりすることにより、言語関連部位の確認が行われた。最近では機能性MRIなどによって、言語タスクを与えたときに機能する部位が確認されてきた。
2. 良心を司る脳部位があるのか？
 - a) フィネアス・ゲージ(1823-1860)の場合、前頭葉損傷に伴い、著明な性格変化を引き起こした。良心を失ったのか？
 - b) 良心を失うと言うことはどういうことか。サイコパスの場合。サイコパスの脳にはどういった特徴があるのか。
 - c) 今、脳をどう調べることができるのか。i) 脳の構造異常、ii) 機能性MRI、iii) 機能結合
 - d) 遺伝的に良心がないことがあるか？MAO-A 遺伝子-戦士の遺伝子
3. 良心の脳科学的研究の課題
 - a) サイコパスの脳が障害を起こして良心を持つようになるか？
 - b) 良心のあるなしはデフォルト設定の違いか？
 - c) 良心を解明するストラテジー：守る、知る、から育む、創るへ。

京都と良心

内田 孝

「京都」は、あらゆる対象（思考、文化、芸術、科学…）にアクセスできるパスワード
いかなる時代、地球上のいずれの地域においても / どんな専門分野においても
・京都の地元紙の特性…あらゆる取材対象（事件、人物）を京都と関連付ける
・北海道～沖縄まで、全国の地元紙の取材手法 / 日本：世界に置き換えれば、全国紙も同様

京都の特性は、千年以上にわたって蓄積された政治、文化、産業…データベースの厚み

eg. 10月第1週～ノーベル賞ウィーク。すべての受賞者と接点・関係性をもつ都市
意外なところでは…

生誕100年を迎えた作家・島尾敏雄の妻ミホと同志社の関わり。映画『浜辺の生と死』（満島ひかり）

ミホの養父・大平文一郎（1866-1950）。同志社英学校で新島襄に学ぶ

「…父や母はどんな不都合に出合っても、いつもにこにこ笑っていました」『真珠一父のために』

「京都」は、あらゆる対象を定義して具体化する際、太い補助線になる

千年の都、王城の地 / 天変地異（地震、水害）、戦争、感染症（祇園祭）

聖書が記す災厄（洪水、伝染病、飢饉…）を経験し、廢都にならず今日に至る都市

賀茂氏、秦氏ら平安京以前、明治維新以降の疏水や市電、博覧会による復興も含めて検討

京都の歴史は、巨大なデータベースで「洛中洛外図」

都市自身が生き延びていく知恵を持ち、自ら活用する仕組み、本能か

「京都」についての考察を踏まえ、

「良心」を定義付けするなら…… 個人だけでなく集団、組織が種や文化、生活様式を伝承し、
未来へ続かせていくための考え方。善悪、成功失敗など一見正反対の要素も切り捨てることなく
内包し、選択肢として保存・活用する手法。「良心」は、単なるモラルという枠を超えた思想
と捉えられるのではないか

【読書ガイド補足】

小冊子以外に島尾その人の『死の棘』（新潮文庫）、吉田満との対談『特攻体験と戦後』（中公文庫）
などに加え、梯久美子『狂うひと』（新潮社）など。「京都」を手がかりにした読書ガイド
は、果てしなく広がる。

※ レジューメ作成に当たり、「良心学研究会」の議論と、記者としての個人的な取材経験を基
にした。また、関西のマスコミ各社と京都大学防災研究所などの研究者でつくる減災報道研究
会「関西なまずの会」での議論、2010年4月から京都新聞朝刊で1年間、京都関連本を紹介
した松岡正剛氏の寄稿「本の大路小路」のデスク作業に負うところも大きい。

新島襄と良心

伊藤 彌彦

1) はじめに：良心を学問対象にするためには、サイエンスの方法による分析、および「良心」の社会学的機能を考察することが必要

2) 歴史学と良心

・ある文化圏において、良心あるいはそれに類似する言説、が人心をとらえ、時代思潮となる現象を考察する。

・小集団であるが強いインパクトをもつ「良心」の社会的存在の意味を考察する。例) クエーカー教徒の「良心的兵役拒否」

3) 新島襄が暮した頃のアメリカ

・新島襄が多くの日本知識人と異なる点は、書物や短期の滞在による西洋知識ではなく、10年間（1864/7/17－1874/11/26）西欧圏で生活し、異文化体験を積んだ人物であったこと。

・アメリカにおける大学の誕生と発達

・19世紀でも大学は徳育優先の教育

・F. Wayland, *The Elements of Moral Science* (1835) 登場の画期性

conscience は19世紀アメリカの時代精神となった。「教会の権威と聖書の権威は、個人的良心の権威にとってかわられた」(D.H.Meyer, *The Instructed Conscience*, p.137)。

大学4年生科目「道徳哲学」は、アメリカ社会に道徳的指導力のある指導者層づくり。キャラクターの重視、人間の使命感の強調。実践編には社会科学も

4) 帰国後の新島

・教育と伝道活動を通して、新しい人間、社会、国家を築こうとした。
自立した個人、私立大学、自治教会

・教育者としての新島襄は、すぐれた人物を育成

柏木義円、徳富蘇峰、深井英五、安部磯雄、山室軍平…